

東京、2026. 1. 31-2. 1

# 不妊治療後の流産患者に対する心理ケアの現状と課題

～生殖医療相談士チームでの取り組みを通じて～

氏名：松山 由紀子<sup>1</sup>・皆吉 田津子<sup>1</sup>・中岡 義晴<sup>1</sup>・竹林 七重<sup>1</sup>・森本 義晴<sup>2</sup>

<sup>1</sup>IVF なんばクリニック <sup>2</sup>HORAC グランフロント大阪クリニック

## 【目的】

不妊治療後の流産は夫婦に大きな心理的負担をもたらす。当院では生殖医療相談士資格を持つ看護師 7 名が心理ケアを担っている。流産ケアの現状を明らかにし、より良い看護の在り方を検討する。

## 【方法】

2023 年 5 月～12 月に流産手術を受けた患者 80 名を対象に、経過毎の心理状態をカルテから後方視的に抽出・分析した。

## 【研究デザイン】

後方視的記述的研究

## 【結果】

手術決定時には多くの症例で流涙や「本当に辛い」など強い悲嘆がみられた。一方で、「覚悟していた」淡々と説明を聞いているなど、感情の表出が少なく気丈にふるまう様子もみられた。手術後 2 週間のフォローでは、「話せてすっきりした」「気持ちを出して楽になった」など、感情表出による心理的整理が進んだという語りが得られた。また、「話すことで向き合えた」「引きずっても仕方ないと思えるようになった」など、悲嘆から受容へ向かう姿がみられた。一方、「話すことはない」「大丈夫です」と感情を抑える患者も一定数存在した。流産後パンフレットは手術直後に配布し、手術後 2 週間の時点で多くが読了していた。内容をきっかけに「供養に行った」「夫も読んで泣いていた」「治療について夫婦で話し合った」など、夫婦の対話やグリーフワークに寄与していた。夫の反応は、「夫の方が落ち込んでいる」「一緒に泣いてくれた」など主体となる例がある一方、「温度差がある」「自分だけ落ち込んでいる」と語る例もあり、夫婦関係の在り方が心理状態に影響していた。3 か月後は、「移植が怖い」「前回は思い出して不安」など長期的な心理的負担が確認された。一方、治療に前向きな様子や「仕方なかった」など、時間経過による意味づけの進行もみられた。卒業時には「流産が一番しんどかった」「看護師に話を聞いてもらい救われた」など、流産経験が印象に残る語りが多かった。

## 【考察】

流産手術直後は感情が整理されにくい、2 週間後は悲嘆の表出と意味づけが進みやすく、心理ケアの好機である。パンフレットは夫婦の対話や供養の契機となり、夫の悲嘆も顕在化した。

#### 【結論】

術後 2 週間の心理ケアとパンフレット活用は有効であった。夫への支援と長期的フォロー体制の整備が課題である。